

イジワルな先輩に上書き保存、されちやいました

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話

「——で、結論から言うと、会社の資金繰りが、かなり深刻だ」朝イチの全体ミーティング。

いつもは冗談まじりに話す社長が、真顔でそう言い放った瞬間、会議室の空気がピタリと止まつた。

水を飲み込んだ誰かの喉の音すら響く。

私——入社したばかりの新人社員・黒川美里は、ペンを握る手にじんわり汗が滲んだ。

「理由は簡単だ。国からの補助金が打ち切られた……。うちの主力だった“地雷撤去用アーム”も“核燃料の遠隔回収デバイス”も、

事故や戦争が風化すれば必要性は薄れていく。もう世間の関心は別の方向に移ってしまったんだ」

静まり返る会議室。

そうだった……この会社は“人の命を守る技術”を真面目にやってきたんだ。

もともと儲けるためじゃなく「人の役に立ちたい」って志で動いてきたから利益は薄く、ずっと綱渡り経営。

補助金がなくなれば——たちまち行き詰まる。

社長は目を細め、しかし揺らがない声で言った。

「しかし、ここで潰れるわけにはいかない。だから新規事業を立ち上げる。“大人向けVRデバイス”だ」

誰かのペンが転がり落ちる音がやけに大きく響いた。

「よめきが広がる中、私は思わず目をぱちくりさせた。

大人向け……つて、つまり……エロ？

社長はすかさず補足した。

「誤解するな。アダルト市場を馬鹿にしてるわけじゃない。むしろ真剣に挑めば必ず成果が出る。AI や VR の進化で、需要は爆発的に伸びている。ここで稼ぎ、資金を作る。その上で、本来の事業に戻る。それが最善の道だ」

社長の視線が、じわりとこちらに注がれた。

「そこで、女性の視点が必要になる。……黒川、君に任せたい」

「へエつ!!」

唐突すぎる指名に、思わず変な声を出してしまった。

会議室の全員が一斉にこちらを振り向き無数の視線が突き刺さる。背筋に冷たい汗が伝つた。

「黒川、君、見た目もイケてるし、若い感覚を持つてるだろう」

私は必死に顔の引きつりを『まかしながら、はい、と返事をした。

——ああ、完全に誤解されてる。

地元じや、私はただのガリ勉で、教室でも図書館でも参考書ばかり抱えてた。恋なんてしたことなくて、もちろん男の人と付き合つたことなんて一度もない。

周りからも“真面目キャラ”で通っていた。

でも——都会に出るとき、私はその殻を捨てようと決めた。
田舎のガリ勉のままじゃ絶対に舐められる。

だから、髪を巻いて、メイクも濃いめにして、派手な服を選んだ。
強そうに見えるように、必死に作つた“仮の私”。

中身は、勉強しかしてこなかつたウブな少女のままなのに

偽のイケイケな見た目がまさかこんな形で社長に買われるなんて。

昼過ぎの開発室。

窓際の席にいたのは、私のペアに決まつた男——菱田誠。

三つ上の先輩で、黒縁メガネに無造作なスーツ姿。

キーボードを叩く音が止み、菱田先輩の視線がゆっくりと私に向けられる。

「おい、黒川。……このグラフ、何回間違えれば気が済むんだ？」
「え、でも指示通りに入力したはずで……」

おそるおそる答えると、彼はあからさまにため息をついた。

「はあ……だから女は数値に弱いって言われんだよな」

わざとらしく首を横に振り机に突つ伏すようにして書類をめくる。

「なに？ 都会デビューで見た目だけ派手にしても、中身は田舎のガリ勉のままか。だつたら最初から無理すんなよ」

背中に突き刺さる同僚たちの視線が痛い。

必死に声を振り絞ろうとした私を、さらに追い込むように彼は鼻で笑つた。

「……ああ、面倒くせえ。今回のプロジェクトだつて、どうせ俺がフォローするんだろ？ その代わり、感謝ぐらいは忘れるな。俺がいなきや、お前なんか何もできないんだから」

そう言い放ち、またモニターに視線を戻す。

まるで「お前は俺の足手まといだ」と言わんばかりに。

菱田先輩は、どうしようもなく意地悪で、口を開けば嫌味ばかり。

けれど技術者としての腕前は誰もが認めるところでチームの中でも一目置かれていた。

コードのバグを一瞬で見抜き、複雑なシステムも鮮やかに組み上げてしまう。だからこそ彼に強く言い返せず、棘のある言葉に耐えるしかないのでった。

「……で、なんで私がペアで実験対象なんですか？」

机に並んだ試作品のパネルを前に、私は声を荒げた。

開発中なのは“VR快感デバイス”。

装着すれば実際に女体に触れているかのような感覚を再現する。

「……リアルな女の反応データが足りないんだ」

菱田は淡々と言う。

「だつたら、プロの人とか……その、AV女優さんからデータを取ればいいじゃないですか」

「ダメなんだよ。ああいうのは“職業的な反応”だ。カメラの前であえぐ声や表情は、素人のリアルとは全然違う。俺たちが作るのは“リアルに好きな女を抱いているように感じる”デバイスなんだ。プロの女優の反応じや、ユーモーは冷めちまう」

「……じゃあ、他の社員さんの彼女さんとか奥さんとかで……」

菱田は机を指で叩きながら、私を真つすぐ見た。

「この会社のフロアを見渡してみろよ。女っ気ゼロだろ。彼女がいそうな奴、いるか？ましてや結婚してる奴なんか一人もいない。八年ぶりに入つた女の新入社員がお前なんだよ。現実見ろ、黒川」

美里は、ぐつと奥歯を噛みしめた。

一流大学を出て、地雷撤去や遠隔アームの研究をやるはずだった。誇りを持つて技術者になるために就職したのに

——なぜ、自分が“快感データのサンプル”になんて。

菱田は私の反応を試すように、静かに椅子を引き寄せた。

「なにその顔。お前、アダルトだからって、このプロジェクト
なめてんの？」

「……そんなことありません。そうですよね、菱田先輩つて彼女
いなさうですし」

わざとらしく肩をすくめ、精一杯の皮肉でやり返す。

「だったら……私がサンプルになるしかないですよね」

菱田は鬱陶しそうに眉をひそめ、苦々しい表情で口を開いた。

「お前が地雷撤去とか、福島の原発を助けたくてこの会社に入ってきたのは知ってるよ……でもな、今は会社 자체が潰れそうなんだ。きれいごとだけじゃどうにもならねえ。お前も技術者の端くれなら目の前の仕事に真剣に向き合えよ。成果を出せ。それが、今お前にできる唯一の“人を助ける”方法だろ」

その言葉に、胸の奥がぎゅっと詰まる。

……そうだ。私はただの実験材料じゃない。
技術者としてここにいるんだ。

証明してやる、自分だって立派なエンジニアだつて。

第二話

開発室の照明は、いつもより落とされていた。

静まり返った空気の中、私は中央の椅子に腰を下ろす。

無意識に膝をすり合わせてしまい、爪先が小刻みに震えていた。

心臓が喉までせり上がり、呼吸がうまくできない。

「リラックスしろ。今日は声紋データ取るだけだから」

菱田の声は落ち着いている。

けれど、その目は獲物を観察するみたいに冷たい光を帶びていた。

喉元に小型センサーを貼りつける。

音声や呼吸の変化を拾う機器らしい。

菱田はパソコンの画面に視線を落としたまま、低く告げる。

「じゃあ、始めるぞ」

次の瞬間、肩口に彼の手が置かれた。

「……っ」

体がびくりと震える。

背筋をすべるように撫でられると、くすぐったこと同時に知らない熱がじわりと広がった。

——でも、声が出ない。

感じていることは認めざるを得ないのに、口が固まって動かない。

「おい」

菱田が不満げに眉をひそめた。

「黙つてたらデータにならんだろうが」

舌打ちと同時に、今度は指先がブラウス越しに胸元をなぞる。布地の上からなのに先端まで火照りが走り、思わず喉が鳴った。

「あ……っ」

「違う。そうじやない」

菱田の手が止まる。

「……お前、さつきからなんだその反応。やる気あんのか？」

胸を鋭く抉るような言葉。プライドが粉々に碎かれていく。

「私は……」

声にならない。息が詰まって、ただ視線を落とすしかなかつた。

菱田は深いため息をついた。

「もういい。今日は帰れ。やる気のない奴に構つてゐる時間はない」
突き放すような声。私は機材を外して部屋を飛び出した。

夜のオフィス街。

足音だけがコツコツ響く。

悔しい。悔しい。悔しい――。

何も言い返せなかつた自分が情けなくて、拳を握りしめた。

唇を噛んでも涙はこぼれ落ちる。拭つても拭つても止まらない。

でも、こんなところで終われない。必ず見返してやる。

胸の奥で悔しさが熱に変わっていくのを、私は確かに感じていた。

第三話

夜の街は、人いきれとアルコールの匂いでむせかえるようだった。終電間際の繁華街を、私はただ足の向くまま歩いていた。

——黙つてたらデータにならんだろう。

——なんだその反応。やる気あんのか？

菱田の冷たい声が、耳にこびりついて離れない。

あのとき声を出せなかつたのは、私が処女だからだ。

どうすればいいのか分からなくて、体が固まつてしまつた。

ずっと守つてきた“それ”に、意味なんてあるのだろうか。

そんな事を考えながら歩いていると、脂ぎつたサラリーマンに声を

かけられた。

「ねえ、おねえさん、いいじやん、ちょっとだけ……」

普通なら無視していただろう。

けれど私は足を止めた。

誘われるまま、安っぽいビジネスホテルに入る。

エレベーターの鏡に映る自分の顔は、ひどく無表情だった。

部屋に入るなり、男はニヤニヤとネクタイを外し、こちらを值踏みするように舐め回す。

「マジかよ……ダメ元で声かけたのに、ホントについてくるなんて……俺、今日ツイてんな」

脂っぽい息が肌にまとわりつくたびに、嫌悪感で鳥肌が立つ。

服を乱暴に剥ぎ取られ、ブラウスが床に落ちる音がやけに響いた。

「うわ……デカいじゃん」

そう言うなり、いきなり胸にしゃぶりついてきた。

「んっ……」

唇を噛んで声を殺す。

ベロベロと舌を這わされ、乳首へと濡れた筋が引かれていく。

チュチュチュツと赤ん坊のように吸い上げられた。

「やっ……」

思わず肩が震える。甘さも熱も何もない。

痛みに近い刺激が乳首を引きつけ、胸の奥に鈍い不快感ばかりが